

ジャーゲンはいかにして皇帝となるのか ーキャブルの抑圧との戦い方ー

How Does Jurgен Become the Emperor? : Cabell's Struggle against the Moral Suppression

渡 邊 真由美

Mayumi Watanabe

要旨: 1919年に出版されたジェイムズ・ブランチ・キャブル (James Branch Cabell) の『ジャーゲン』 (*Jurgен: A Comedy of Justice*) は、これまで大人向けのファンタジー小説としてみなされることが多かった。しかし、本論考では、キャブルが神話や伝説を取り込みながら、当時のアメリカ社会を批判的に描いていることを明らかにした。

キーワード: 神話・伝説 ニューヨーク悪徳撲滅協会 寓話

はじめに

ジェイムズ・ブランチ・キャブル (以下、キャブルと表記) が、1919年に発表した『ジャーゲンー正義についての喜劇ー』は、若い頃は詩人になることを夢見ていた40代の質屋の入り婿、ジャーゲンが、悪魔を擁護したことから物語が始まる。悪魔はその見返りに常日ごろから口うるさい彼の妻リサを異界へと連れ去り、ジャーゲンは妻の親戚たちに説得されてリサを探しに行くことになる。実体を持たない影のような姿となったリサに洞窟へと導かれて入り込んだ異界で彼は若さを取り戻し、神話や伝説の世界で自分が望む身分を手に入れ、数多くの女性や女神たちとの恋愛を楽しむ放埒な旅をし、元の世界に何事もなかったかのように戻る、という物語である。

妻を探すジャーゲンの旅は、ヨーロッパに古くから伝わる聖杯伝説の変奏の一種と言っても良さそうでもあるし、エウリュディケを連れ戻しに冥界へ行くオルフェウスの神話とも重なる。しかし、彼の旅は信仰心に突き動かされたものでも、妻への愛によるものでもない。悪魔は、「お前さんは芸術家的気質を持っている。そんな人物には家庭生活の束縛は似つかわしくないよ」 (*Jurgен*, 4. 以後、特に記載がなければ同書からの引用) とリサを連れ去る理由を説明する。つまり、ジャーゲンを家庭生活から解放し、芸術家としての生活を追求する自由を与えるためののだ。実際のところ彼は、リサがいなくなっても彼女に絶対的な信頼を寄せていることを口実にして、自分から探そうとはしない。彼の搜索の始まりはあくまでリサの親族に促されたからである。

では、ジャーゲンは旅に何を求めるのか。キャブル自身は『ジャーゲン』出版後に起こった発禁騒動の顛末を報告した文書中で、この作品について「自分の資質が示すことのできるもの」 (『『ジャーゲン』と検閲』 (*Jurgен and the Censor*, 8) を提示することである、と生まれもった資質によって人生のあり方が決まるという一種の運命論的な見解を述べている。最終的にジャーゲンは自分の旅が幻である、という認識に至るけれども、旅そのものは、妻から

解放され、若いころに果たされることのなかった初恋の女性を追い求める行程をたどるといふ人間の根源的な性への欲望に結びついている。表面的には、結婚という制度から解放された男性が得る、時間からの自由、道徳からの自由を描いている。しかし、この作品は自由追求の旅物語という枠には当てはまらない要素を多分に含んでいる。

キャブルは、1879年、ヴァージニア州リッチモンドに17世紀から続く旧家に生まれ、生涯の大半をヴァージニアで過ごした。幼い頃からギリシャやローマの古典文学、中世の文学に親しみ、ウィリアム・アンド・メアリ大学に進学するとフランス・ギリシア文学を学んだ。鍋島能弘によれば、学部生の頃からギリシャ語とフランス語の講師を勤めていたとあり、若い頃からヨーロッパの言語や歴史に秀でていたようである。1898年に大学を卒業した後はジャーナリストとして複数の新聞社に勤め、ニューヨークで働いたこともあったが、わずか2年ほどでジャーナリストの職を捨ててリッチモンドへ戻る。その間にもヨーロッパの歴史についての関心を失うことはなく、研究を続けていたらしい。やがて1904年に『鷲の影』(*The Eagle's Shadow*) を出版したことを皮切りに、58年に死ぬまでに40もの作品を発表した。彼の作品は、南部を舞台とするもの、ポイクトスムと名付けたフランスのプロヴァンス地方をモデルとしていると思しき架空の町を舞台としているもの、中世を舞台としたものに大別できる。

彼が、中世や神話・伝説を取り入れた小説を多く手がけたのには、彼が人生のほとんどを過ごしたアメリカ南部という環境が影響しているように思われる。ヴァージニアを含めた南部諸州は植民地として建設されて以来、とりわけ富裕層において経済的にも文化的にもヨーロッパとの結びつきが強かった。宗教的迫害を逃れて、信仰(ピューリタリズム)を中心とした理想国家の建設を目指した北部と異なり、南部では、ヨーロッパの神話や伝説を受容する素地があった。

南部の生活を回想した『嘘をつかせて』(*Let Me Lie*) (1936) の中で、ヴァージニアでは「自分たちの歴史を自由裁量で改変し」、「歴史を啓発し、喜ばしいものへとする」ためには、どんな僅かなものでも受け容れて「自分たちの郷土愛をより高め」、歴史を「記録ではなく、信条(faith)」として捉えていた、と言い切る(『嘘をつかせて』, 74)。この引用からは、南北戦争後の南部の経済・政治体制の崩壊と同時に、アメリカ合衆国の歴史が北部の視点によって上書きされたことに対して、南部の人々の間に強い不満があったことが伺える。キャブルの回想の中で特に興味深いのは、南北戦争以前のヴァージニアを知る人たちが、南部連合の司令官であったロバート・E・リーをアーサー王や中世の騎士になぞらえていたことである(リーマー, xiii)。リー將軍をアーサー王と重ねることで、南部をアングロ・サクソン(北部)に侵略されるブリテンとして置き換えを行い、いずれは英雄(アーサー王)によって解放される日が来る、という願望を表しているように思える。キャブル自身は、そのような歴史の改変を違和感を持って聞いていたと述べている。幼い頃から親しんできたヨーロッパの神話や伝説への深い理解と、それらを取り込み、自在に歴史を改変していく南部の精神的風土がキャブルの文学の基礎を築いていることは間違いなく、『ジャーゲン』もまた、神話・伝説をたくみに物語の中に取り込んでいる。

キャブルの作品は、彼と同時代のマーク・トウェインやH. L. メンケンなど著名な文学者たちに高く評価された。『ジャーゲン』もまた出版直後から注目を集め、全米の雑誌や新聞紙上で50もの書評が掲載され、そのほとんどが好意的であったという。しかし、アメリカ社会の風紀を乱す猥褻な文書や行為を取り締まる目的で設立されたニューヨーク悪徳撲滅協会(New York Society for the Suppression of Vice)の首魁であったジョン・S・サムナーによって取締の必要ありと判断され、アメリカ郵便を使った猥褻な文書の郵送禁止を定めた法律(コ

ムストック法、1873年)の規制対象となり実質的な発禁となる。しかし、裁判でメンケン、シンクレア・ルイス、ヴァン・ワイク・ブルックス、エイミー・ロウエル、シオドア・ドライサー、ユージーン・オニールなどの多くの著名な文学者たちの同作品を擁護する動きが活発化し、サムナーは発禁処分を解かざるをえなくなった。このことによって、『ジャーゲン』はかえって多くの人々の注目を集めてアメリカ国内でベストセラーとなり、その評判は海外にまで及んだ。

しかし現在では、キャブルの名も『ジャーゲン』という書名もほぼ忘れられている。同書が発表された20世紀の初頭といえば、貧富の差の拡大を背景にした労働運動の激化や政治腐敗などが社会問題化し始めた頃である。当時、アメリカ文学の主流を占めていたのは、現実のありのままの姿を小説の中に再現しようとするリアリズム(写実主義)文学であった。その中から、社会主義的傾向をもった小説家たちが現れ、前述したようなアメリカ社会のひずみを告発する文学がもてはやされるようになった。さらに、シャーウッド・アンダーソンなどの登場でモダニズム文学が台頭し始め、文学的により高い評価を得たことも大きく影響していると考えられる。これらの要因が重なって、『ジャーゲン』は時代遅れのものとなっていったに違いない。

しかし、キャブルの創作技法は、後述するようにあえてリアリズムの手法を捨てたことによって確立したもので、アメリカ文学史上、稀有な作家と言っていい。それらを明らかにしながら、『ジャーゲン』の新しさとテーマの普遍性を解明しようとするのが本稿の目的である。

第1節

キャブルは『ジャーゲン』出版と同じ1919年に自身の文学論をまとめた『人生を超えて』(*Beyond Life*)を発表している。内容は、ほぼリアリズム批判と言っていいが、その中で語り手が友人と対話し、小説のあるべき姿について以下のように語っている。

有り体に言ってしまうえば、第一級の芸術というものは、それが創作された当時の社会背景を再生産しているのではないし、…物事があるがままに描く小説は、作者にも読者にも決してイマジネーションの構築を求めることはない。現在、流通している「リアリズム」は、お安い、かつ移り気な出版社の要求に従っているだけのものである…。(『人生を越えて』, 15)

キャブルのいう芸術としての文学は、現実の世界を写しただけではない作家独自の世界を作品の中に構築することである。キャブルに言わせればリアリズム文学は、現実を写真のように写し取っただけであり、芸術とは言い難いものなのだ。キャブルにとっての小説の理想形とは、ロマンス小説であろう。一般にアメリカ文学におけるロマンス小説とはリアリズム小説が登場する以前に現れた古い文学形式と考えられ、非日常的な出来事を作者のイマジネーションによって再構築されたものを言い、彼の小説作法に合致する。

だが、ここで注意しなければならないのは、キャブルが目指したのは単に非合理的な空想小説ではない、ということである。アメリカの歴史は近代から始まったとよく言われるが、北アメリカへの入植が開始された17世紀には、ヨーロッパで啓蒙主義思想が広まっていた。啓蒙主義時代には、この世にあるすべてのものは人間の英知によって解明されるものであって、人間の行動そのものも合理的であるべきだとする考えが広まった。さらに19世紀半ばになると、科学技術の発展を背景にして、それまで存在すると信じられてきたユニコーンやドワーフが森を闊歩したり妖精が飛んだりしている世界は、人間が作り出した空想の産物とされた。アメリカの原野は、人間が開拓し、利用するものとみなされ、空想上の生き

物が存在する余地はなかった。人間が再び、想像の世界に入り込む為には、読者を納得させるだけの理由が必要になったのである。『ジャーゲン』の場合は、悪魔によって連れ去られた妻を探すことである。異界へと導こうとする妻にジャーゲンは、「お前を追いかけて行こう。なぜなら、それは男らしい行為だからだ」(7) と言い、夫=男性として果たすべき当然の義務であると宣言する。リサの親族に促された行為であっても、最後には自分の意思で行うことを強調し、読者にジャーゲンの旅が英雄的行為であることを印象付ける。しかし、異界に入り込んだ彼の旅は、リサとの結婚という制度から解き放たれて自らの恋愛をひたすら追求することに終始するのである。

『ジャーゲン』はポイクトスムでの世界を外枠として、その内部にジャーゲンの妻を探す旅が入り込む入れ子構造を持っている。ジャーゲンの旅の部分は、彼が異界に入り込み若さを取り戻してかつての恋人との恋を成就させようと奮闘する第一部、騎士の身分と剣を手に入れて伝説の王女や女神との情事を楽しむ第二部、地獄や天国にいる祖父、父、母を訪ね、さらに万物の創造主コスチエイと語り、自分の旅の意味を探る第三部の三つの部分に便宜上分けることができる。

第一部で彼が追い求める若き日の恋人は、ドロシー (Dorothy la Désirée、フランス語の欲するを意味する動詞*désir*から) という名が与えられ、ジャーゲンは「私の望み」(“my Heart Desire”)と呼びかけ、彼が欲するもののすべての化身として登場していることは間違いない。ドロシーは物語の間、名と身分を変え幾度となくジャーゲンの前に現れるが、最終的に彼とドロシーとの恋が成就することはなく、彼の欲望が充足されることはない。しかし、ここで思い出しておかねばならないことは、そもそも悪魔がリサを連れ去った動機が、ジャーゲんに芸術的な創造性を再び与えるためであったことである。つまり、彼の欲望とは芸術的創造性の追求と青春時代の恋の成就の二つが分かち難く絡み合っているものなのだ。

よって、『ジャーゲン』は、芸術としての文学作品を完成させようとするキャブルの作家としての意志と、ジャーゲンの人間にとって極めて根源的な欲望である性とを効果的に表現するために神話世界を構築したものと考えられる。ケンタウロス (ギリシャ神話に出てくる半人半獣の怪物)、ブリトンのアーサー王 (英国の伝説上の王)、グヌヴィエ (アーサー王の妻)、マーリーン (アーサー王伝説に登場する魔法使いの預言者)、ランスロット (アーサー王の円卓の騎士、グヌヴィエと不義の恋に落ちる)、湖の婦人、別名をアナイティス (前者は、ランスロットを養育するとともに、アーサーが埋葬されたアヴァロン) の支配者、後者は古代ペルシア、ギリシャにおける水の女神)、ヘレン (スパルタ王の妻、トロイア戦争の発端となった女性) など、神話や伝説上の人物が多数登場する。これらの登場人物たちを、ジャーゲンはトリックスターとなって結びつけていく。いくつもの神話・伝説が複層的に重なり合い、不思議な物語世界を創り出している。

例えば、トルルの王に捕らえられたグヌヴィエはジャーゲンによって救出される (アンドロメダがペルセウスに救出される場面を思い起こさせる)。彼女にはアーサー王からの結婚の申し込みがあるにも関わらず、ジャーゲンはグヌヴィエの父親グラシオンの王に救出の褒美として彼女との結婚を願い出る。父王は国家の利益を優先し、ジャーゲンの願いを拒絶するが、二人の間には性的な関係があったことをほめめかす場面が幾度もみられる。グヌヴィエとランスロットの不義は円卓の騎士の伝説を彩るものとして有名であるが、ジャーゲンとの関係は中世の騎士道に則った高潔な恋愛というものではなく、自らの欲望に忠実に従ったものとして捉えることができる。

アーサー王とグヌヴィエの結婚を祝うためにランスロットと共にグラシオンに来ていた湖の婦人 (アナイティス) は、ランスロットがグヌヴィエと恋愛の秘薬を交換したことを確

認すると、ジャーゲンと共に自らが治めるコカインへと戻り、2人は結婚する。結婚が破綻するとジャーゲンはトロルの王から盗んだ剣カリバーン（アーサー王が湖の婦人から与えられた剣、エクスカリヴァーを思い起こさせる）をコカインに残し去っていく。その剣がアナイティスからアーサー王に譲渡されたという後日談が挿入され、アーサー王の伝説の背後にジャーゲンがいて、まるで彼が伝説の下書きを書いているようである。また、イギリス王ヘンリー8世がモデルとなっていると思われる王妃を何人も殺してしまうスモイト王が、ジャーゲンの祖父（祖母が浮気をして彼の父親が生まれたことになっている）であることが、王自身の告白によって明らかになる。王は、王妃殺害の罰として、毎年同日に幽霊となって現世に現れ、演劇のように殺害場面を再現しなければならない。しかも、ジャーゲンのもとに現れたのは、王妃殺害の再現を手伝わせるためであり、伝説上の人物を茶化している。

偉大とされる人物たちをジャーゲンというトリックスターで結びつけることで、それらの人々の英雄性を剥ぎ取り、キャブルが子供の頃に聞いていた南部にまつわる歴史改変への意趣返しとして捉えることもできる。

このようなキャブルの創作態度には、重要な問題が含まれている。先にも述べたように、キャブルは同時期のアメリカ文壇の主流となっていたリアリズムを毛嫌いしていた。彼は文学のあるべき姿を次のように主張する。

現代の生活（contemporary life）を小説にしようとするなら、かつそれが真面目な芸術家のタイプライターを経由して生まれてくるものであるならば、最も古い形式に立ち返らなければならない。つまり多かれ少なかれ、寓話となるのだ…。（『人生を越えて』, 263-64）

つまり、キャブルは神話を使うことによって、当時の“life”を作品の中に描こうとしていたと言える。広く知られているように、ギリシア神話の神々は行為や思考が極めて人間である。必ずしも完全な善なる存在ではなく、神々の中の争いや奔放な情事まで、およそ人間生活の全てが投影され、むしろ伝説を集積したものと考えた方が良いエピソードが多い。キャブルは神話の中にジャーゲンを迷いこませることで、神々の開放的でおおらかな姿を利用して解放的な性を描き、当時の“life”のあり方を暗に批判したのではないか。

当時のアメリカ社会では、社会改良運動の進展に伴って、公序良俗に則った生活を重んじる機運が高まっていた。『ジャーゲン』を発禁としたコムストック法や禁酒法などが多い例である。キャブルはこのような傾向に批判的であった。

民主主義社会の倫理観とは、結局のところ、初等程度の算数なのだ。つまり、良いものと悪いものとを区別するために投票用紙を数える（俗に言うように、時々には真つ当に）。なぜなら、人民の声は悪名高い神の声だからだ。（『「ジャーゲン」と検閲』, 8）

と述べ、多数の意見の前に個々の意見は抹殺され、しかもその多数によって形成され、社会全体の意思とされた倫理観の危うさを「初等程度」という言葉で批判している。

キャブルからすれば、「リアリストたちは、ニューヨーク悪徳撲滅協会の代理人」（『人生を越えて』, 2）であり、この多数派形成を促進する側でしかないし、写實的に描くことにこだわるあまり文学上の芸術的な要素を捨象し、作家が本当に扱わなければならない当代の社会を描くことができなくなっていることを痛烈に批判している。社会的な圧力をキャブルはリアリズムの対極にある神話・伝説を取り入れて寓話を創り出すことでたくみにかわし、創造的な想像力を真に芸術的な文学作品へと昇華させ、さらに、芸術を生み出すことを阻害する押し付けの倫理観に対する批判を『ジャーゲン』で行ったのであろう。

第2節

ここでは、ジャーゲンの異界での旅の意味を考えたい。

第一節で、異界での彼の芸術の探求は性的欲望と結びついていると述べた。ジャーゲンの数々の情事を物語の中では「正義“justice”」という言葉で置き換えている。『ジャーゲン』の中で使われている「正義」は、日本語の「人の道にかなって正しい」という概念ではない。例えば、水曜日を支配するマザー・セレダの不思議な力によって若さを取り戻し、ドロシーが貴族のハイトマン・ミカエルとの結婚を決める直前に時間を戻してもらったジャーゲンは、彼女との恋を成就させようとハイトマンと決闘し殺害することを企む。

僕は自分の運命を引き受けます。泣き言も言わずにね。それでもって正義がなされるのです。僕は自分の正義を主張するだけなのです(46、下線筆者、以下同)

と言い、決闘の正当性を主張する。思惑通り、ハイトマンを殺した彼はその死体の上に座り、「敵の骸に、愛する人とともに座れるなんて。正義はなされ、全てはあるべきように収まっている」(47)と満足する。しかし、日付が変わる頃になるとシンデレラよろしくドロシーは若さと美しさを失ってしまう。そのことに気づいたジャーゲンは、「いけない。これは、私たちが他人に対して負ってしまった公正ではないことなのです。憎むべき罪です」(49)と捨て台詞を残して、ドロシーをミカエルの死体と共に置き去りにして、旅立ってしまうのである。「正義」という言葉を独自に使っている例をもう一点挙げてみよう。ジャーゲンがマザー・セレダを讃える詩を捧げると、その返礼として「…お前の問題を解決できるのは、コシュチェイ唯一人のみ。絶対に、お前が正義のために行くべき場所は彼のところだよ」(34)と、マザー・セレダはリサを取り戻すヒントを彼に与える。ここでの「正義」は妻を取り戻すことであり、やはりジャーゲンの希望を叶えることと同義である。

第二部で「正義」の定義をしている場面がある。ジャーゲンはコカインの女王であるアナティスと結婚して王となる。コカインの住民はおのおのがどのような存在であるのかについて「全ての言葉を掌握している」(156)言語学者の長による判断を仰がなければならない。ジャーゲンが正義について尋ねると、「正義は単なる一般名詞で、個人に対してであれ、共同体に対してであれ状況に適切に対応しようとする倫理的な見解をほんやりと表現している」(157)に過ぎないものであると説明され、自らの行為の対象に対する妥当性を問題にしていることが分かる。

「正義」が対象に対して果たすべき役割を問題にするならば、その役割とはジャーゲンの社会的立場や身分を反映すると思われる。そのため、ここでジャーゲンの身分の変遷をまとめてみたい。

リサに導かれ異界へと入っていったジャーゲンは、半人半獣のケンタウルスを道案内役として旅を進める。突然、ケンタウルスは馬に姿を変えてしまう。すると、馬の背には「奇妙な素晴らしいシャツ」がかかっており(30)、手綱には伯爵に与えられる宝冠がついている。ジャーゲンはそのシャツを着て旅を続けるのだが、それは「グラシオンでは見たことがないような素晴らしいピカピカ光ったシャツ」(76)であり、「王のシャツ」(204)である。魔法使いのマーリーンも「そのような輝く衣服を身につけていると、私のような腕利きの魔法使いであっても、どこから、いつ、あなたがやってきたのか、ほんやりとしか想像できないし、全くわからないとしか言いようがない」(113)と嘆く。

このようにケンタウルスのシャツは、質屋という素性を消し去り、手綱の宝冠との相乗効果で、ジャーゲンに新たな身分を授ける装置となる。ジャーゲンは、グヌヴィエを救出する際にトロルの王から「私の素晴らしいシャツにふさわしい武器」(58)である剣カリバーンを盗み、「質屋が王女を助けるのは、ふさわしいことではない」(59)と考え、宝冠が伯爵

の位を表すにもかかわらず、自らロゴレス公爵と名のる。その後も、彼はコカインでジャーゲン王となり、地獄ではノウマリア皇帝となって、偽りの称号を名のり続ける。シャツというモノがジャーゲんに権威を与え、その権威がシャツに新たな付加価値をつけ、ジャーゲンが望む身分を自在に手に入れる。だが、宝冠が示す伯爵という爵位とジャーゲンが自ら名乗る爵位は異なっていて、彼が爵位に疎い人間であることを暴露し、彼が自分の身分について語る内容が常にホラ話であることは読者には織り込み済みとなる。

ジャーゲンのホラ話を物語の登場人物たちが信じてしまうほどの説得力のあるものとして描かれているところに、読者はおもしろみを感じるのであるが、他方でキャブルは物語の中で言語学者の長に彼が発する言葉に意味がないことを語らせている。

私 [ジャーゲン] はできるかぎりのことをしたが、彼 [言語学者の長] はジャーゲンという名前がジャーゴン (jargon) から来ていることにしてしまったんだ。夜明けに鳥たちが啼いているようにめちゃくちゃにおしゃべりしているようなもんだ… (157)

ジャーゴン (jargon) とは、研究社の『新英和大辞典』によれば、1. (職業上の) 専門用語、隠語、(特殊な人たちだけに通じる) 通語、(学者間の) 難しい専門語 2. (ちんぷんかんぷんで) わけのわからない言葉、たわごと、とある。つまり、ジャーゲンの発する言葉は、全て言葉を並べただけの意味のないものとなり、彼がシャツを身につけたことによって生じた見かけだけの存在であることが物語のうえでもはっきりする。

キャブルによるエッセイからの先の引用ー「現代の生活を小説にしようとするなら、…、寓話となるのだ…」ーを、本作品にも当てはめるならば、ジャーゲンが舌先三寸で身分を偽っていく様には何らかの意味があるはずである。ここで作者が『ジャーゲン』執筆を進めていた1910年代後半のアメリカ社会と作品の世界を重ねてみよう。第一次世界大戦のタナボタ的な勝利により好景気に湧き、株の取引が流行して一夜にして大金を得る人々が出てきた。内実を伴わない外見だけを取り繕う成金の姿は綺麗なシャツを身につけただけで皇帝にまで成り上がってしまうジャーゲンの姿と重なる。異界での旅も終盤となる第三部で、地獄で暮らすことになったジャーゲンは、吸血鬼フロリメルと結婚し、次のように嘆く。

私 [ジャーゲン] にはフロリメルがありのままの私を愛しているとは信じられない。彼女を惑わしているのは私の称号だ。ノウマリア皇帝などと自分を偽らなければよかった。この皇帝の称号が法外な壮麗さをまとってどこへでも付いて回り、当然のことながら、半神話的な権威を (人は) 無抵抗に受け入れてしまうからだ。この皇帝という見かけ倒しがフロリメルの思考を本物のジャーゲンからそらしてしまう。本物のジャーゲンは彼女の思いもよらぬ人物なのだ。それは、公正なことではない。(250)

すでに言語学者の長によって彼の口を出る言葉がなんの意味も持たないと断じられている以上、彼の言葉によって作り上げられた称号が意味を持たないことは読者には自明のことである。それでもなお、彼は自ら生み出した虚像を生きなければならず、またそれを信じるものも出てきてしまうのだ。

こうしてみると、外見だけで人間を判断してしまう20世紀初頭のアメリカ社会の風潮とまがいものの称号を身につけるジャーゲン、そしてポイストクムでの質屋という仕事がいずれも物質主義に陥っているという点で関連していることがわかる。ジャーゲンは、引退した詩人 [ジャーゲン] にとって質屋という仕事がいかに興味深いかを次のように説明する。

様々なお客がいるんですよ。身分の高い人から低い人、時には上流階級の人たちだってお金に困ることはありますからね。農夫は腰を低くして私の店に入ってきますが、公爵は密かに私の所に使いを送ってよこします。…お客さんは必要以上に礼儀正しく扱ってくれます。質屋と取引をすることを恥じているんですからね。(35-6)

このジャーゲンのセリフは近代における資本制の本質を描き出している。農民から貴族に至るまで質屋の店主に礼をつくすが、彼に対して礼を尽くしているのではない。質屋から引き出せるはずの貨幣を崇めているのだ。同様に、異界でのジャーゲンが身につけているピカピカしているシャツに敬意を払うのであって、彼を崇めているものではない。異界でのジャーゲンが伝説の中の人物やエピソードを繋げる役割をしていると述べたが、質屋という職業はポイストクムの経済に同様の機能をもたらす。ポイクトスムの住人たちは階級の区別なく、自分の持ち物を質屋で貨幣に交換することで貨幣経済の中に取り込まれ、質屋が金・モノ・人をつなぐ機能を果たしているのだ。おそらく、それ以前であれば、彼らは質屋に頼ることなく、物々交換でことが足りたであろう。しかし、一旦貨幣が流通してしまうと、貨幣が絶大な力を持ち始め、それを扱う質屋にもその力のおこぼれが与えられるようになるのだ。異界では彼の称号に、ポイストクムでは質屋の持つ貨幣にとジャーゲンに付随するモノに人が畏れを抱くのである。

他方で、ジャーゲンはマザー・セレダから「若さとそれに付随するすべてのもの」(279)を与えられるが、同時に彼女の影を、彼の「馬鹿話に興味をもち、それを全てノートに書き取る」(278)ための監視役として常に同道させることになる。他の誰も気づくことのないこの奇怪な影の存在にジャーゲンは気づいているが、その影によって「グヌヴィエから気持ちが離れたり、グヌヴィエとの愛から遠ざけられる」(70) こともなかったことで、恐れることもなく、対抗手段として情事となると灯りを消してしまう。ジャーゲンは彼女の裏をかいたような気分になっているが、影は、彼から大切なものを奪っていく。旅の終わりにマザー・セレダに再会すると、影の存在についての彼の意見を述べる。

言うなれば、その時どきの状況に応じた感情に入り込むのを妨げ、他の人々が生活から得ている妙味というものを私の生活から奪い去ってしまったのは、この影ではなかったのですか？ (279)

文学をめぐる当時の状況を考慮に入れると、このジャーゲンのセリフは意味深長なものである。この作品がキャブルが言うように寓話であるならば、彼を監視しているマザー・セレダの影は、ニューヨーク悪徳撲滅協会などの国民を監視する存在とみることができる。とすれば、彼女の影が彼から奪うものは、詩作の為に欠くことのできない表現方法とも取れるだろう。彼の旅が芸術の探求という一面を持っていることは前述のとおりであるが、マザー・セレダの干渉によってその探求が頓挫してしまったことを嘆く姿は、キャブル自身が当時の社会における倫理的な締め付けに批判的で、芸術の衰退を嘆くのと重なって見える。

だが、マザー・セレダは非情にもこの世のルールをチェスになぞらえて次のように説明してみせる。

おびただしいほどの操り人形の演出をしているコシュチェイだって、もっと大きなゲームの中の役立たずでちょこちょこ動き回るキングにすぎないかもしれないだよ。(281)

監視する側＝マザー・セレダによって万物の創造主と説明されるコシュチェイですら、ゲームの駒に過ぎないという認識は、世界が完全なる統制の元に動いていることを思わせる。ジャーゲンは、この監視を嫌って、すべて自分の希望通りになる世界からリサを伴ってポイストクムへ帰ることを決意する。なぜなら、「監視されている下での若さに責任を持つことに本当に疲れた」(286) からであり、妻との生活の中に芸術＝詩があることを見出すからである。

彼女の創造的作品である次なるエッセイは私の夕飯で、あり合わせのものでありながら、精気のやどった即興詩でしょう。明日になれば彼女は私のために叙事詩を紡いで

くれでしょう。そして、続けて出てくるデザートは、最も豊かな叙情詩的な雰囲気を持っているのです。(317)

とあって、リサがジャーゲンにとっての芸術的想像力の源、ミューズであるかのように語り、異界での芸術を探求する旅は終わりを告げる。

彼は、コシュチェイが見せる異界で関係のあった女性たちの幻影を振り払い、「誰も正義など気にしていないのです」(319) と言って元の質屋へと戻っていくのである。自らの身分に応じた状況に対する適切な対応という意味で「正義」を使うのならば、ジャーゲンの言葉が表すのは、彼の偽りの身分も彼の行為も、すべては何の意味もないということではないだろうか。

まとめにかえて

旅の最後にジャーゲンはコシュチェイと対面し、コシュチェイがリサを連れ去った悪魔であることが明らかになる。創造主と悪魔が一体と化した存在は、自分が全てを統制している訳ではないと言う。結局、コシュチェイにしても世界のすべてを把握することはできないし、コシュチェイの役割を演じているにすぎないのだ。そして、ジャーゲンに向かって、全ては幻だったのだ、と彼の一年に亘る旅を総括し、彼を元の世界へと戻して終わる。ジャーゲンはそれを受け入れる。

探していたものは近くにあって気づくことで終わる物語は多い。しかし、『ジャーゲン』は、比較的近代に近いと思われる外枠と、入れ子になっている神話・伝説の世界をパラレルに描きながら、アメリカ社会を批判している。少なくとも、この物語を寓話として当時のアメリカ社会と関連していることを読み解く技量が読者側にも求められている。キャブルの作品が読まれなくなった原因は、もしかしたら読者側にあるのかもしれない。

参考文献

- Attebery, Brian. *The Fantasy Tradition in American Literature: From Irving to Le Guin*. Bloomington: Indiana University Press, 1980. Print.
- Cabell, James Branch. *Jurgen: A Comedy of Justice*. 1919; New York: Dover Publications, Inc., 1946. Print. 寺澤芳隆訳『ジャーゲン』六興出版社、1952年。Print.
- . *Beyond Life*. New York: Robert M. McBride & Company, 1921.
- . *Let Me Lie*. New York: Farrar & Straus, 1947. Print.
- Reimer, James D. *From Satire to Subversion: The Fantasies of James Branch Cabell*. New York: Greenwood Press, 1989. Print.
- Clark, Barrett H. Ed., *Jurgen and the Censor: Report of the Emergency Committee Organized to Protest Against the Suppression of James Branch Cabell's Jurgen*. New York: One Thousand Nine Hundred and Twenty, 1920. Print.
- 鍋島能弘「J. B. Cabellに就いて」『英文學研究』Vol.13, No3. 1933年. p.p. 365-79.

